

「新聞を活用した復興教育」をテーマに、岡山県NIE推進協議会(会長・加賀勝岡山大副学長)の夏季NIEセミナーが8月22日、山陽新聞社の印刷工場さん太しんぶん館(同県早島町早島)で開かれた。岩手

県で7月に行われたNIE全国大会に参加した高橋恵子・真備中教諭、國弘保明・川崎医療福祉大講師、三宅巨・早島小教諭の3人が、同県での取り組みなどについて報告した。要旨を紹介する。

岡山県推進協夏季セミナー

岩手でのNIE全国大会報告

西日本豪雨で大きな被害を受けた真備中から「復興」をテーマとした大会に参加し、胸にズシンと響く経験をさせてもらった。

東日本震災後の復興教育プログラム作成に携わった藤岡宏章・岩手県立総合教育センター所長と面会し、復興は長期戦だと知らされる中で「子どもは未来への希望の光である」という言葉が特に印象に残った。

岩手県では今も復興教育が教育の柱となっており、新聞が社会に開かれた教材として重要な役割を果たしている。地域再生を担う人材を育成する教育課程「ふるさと科」を設けている小中一貫校・大槌町立大槌学園の二つの公開授業でそのことを実感した。

第6学年は、復興に向けて歩む人を紹介した新聞記事を詳しく読み解くことで「自分はどういう未来に関わりたか」という課題意識を育む授業だった。郷土をどう守るかに



倉敷市立真備中 高橋恵子教諭

復興教育を支える新聞

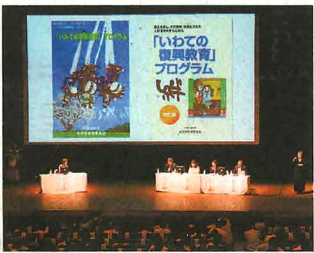
児童が一生懸命考えていることが伝わってきた。

第9学年は、複数の新聞記事から今後の大槌学園の役割について考え、自分のこととして未来を語る学習だった。「震災の経験から学んだことを西日本豪雨で被災した人たちに伝えたい。それが、自分たちが次の災害に備えることにもつながる」と話した生徒がいた。このような言葉が語れる生徒を育てていきたい。

いずれの取り組みも大量の新聞記事に支えられていた。ストックの充実には学校図書館の司書の協力も大きい。復興を後押しする記事を多く掲載している地元新聞社との連携も重要だ。

真備の町をどう復興させ、児童生徒をどう育てていくのかを少しみ考えさせられた。復興の道の中で学び育つための教材として、新聞が強く機能している姿を見た。地域、社会を見据えるために教科書では足りないものがある。それを補うために新聞をどう生かすかを考えていきたい。

岩手県の復興教育などについて話し合われたNIE全国大会の座談会(7月26日、盛岡市)



「いわて県民情報交流センター」るNIEを目指して」をテーマに(盛岡市)で開かれた分科会に参加。新聞の読者投稿欄を利用した表現加。花巻東高(花巻市)の夏井友指導員について話した。也教諭が「どの先生でも指導でき 夏井教諭は、卒業を控えた3年

投稿欄利用し表現指導

國弘保明講師



生を対象に総合学習の時間に実施。生徒は、新聞を読んで気になった記事を切り抜いて意見を述べ合い、400字程度の意見文にまとめて投稿した。掲載された生徒は自己肯定感を高め、されなかった生徒も自己理解を深めるきっかけになったという。生徒は就職や進学で求められる論文などの表現力や面接での対応力を身に付けただけでなく、社会の出来事に関心を持って考察し、マスメディアの有用性も学んだ。NIEが、新学習指導要領が定める「社会に開かれた教育課程」にもつながることを実感した。

川崎医療福祉大

三宅巨教諭



私も被災した大槌町を巡り、旧役場などを見て回ったが、言葉が出なかった。復興が十分進んでいない中で、風化させまいと被災地の状況伝えるメディアや地元の人々の姿を見て、自分自身の意識の低さを恥ずかしく思った。

早島町立早島小

防災学習がより重要に

大槌学園で、東日本大震災からの復興に関する新聞記事を読み比べる小学6年生の授業を見学した。さまざまな記事から、復興に力尽くす地域の人たちの願いや古里への思いなど共通した部分を読み取るという内容だったが、地域の人のために行動に移せる子どもを育てたいと思った。

私は早島小5年の担任で、防災学習に取り組んでいる。特に西日本豪雨を経たことで、より重要だと感じている。これから新聞をもっと活用し、大槌の子どもたちのように、地域の人のために行動に移せる子どもを育てたいと思った。